

日本の主な書籍コードについて

井黒佳穂子

1. 商業出版における書籍コード

現代社会における読書量の低下、電子出版の台頭と相俟って、出版界では出版不況が取り沙汰されているが、新刊の出版点数は年々増加しており、実に年間8万点もの書籍が新たに刊行され、市場に流通している^{*1}。

日本で刊行されている書籍の裏表紙には、日本図書コードと書籍JANコードが付されている〈図版〉。日本図書コードはISBN (International Standard Book Number) に、分類コードと価格コードを加え、日本工業規格 (JIS規格) のOCR-Bフォントで表示したものであり、この日本図書コードを2段のバーコードシンボルで表したのが、書籍JANコードである^{*2}。

現在、日本図書コード及び書籍JANコードは、一般社団法人日本出版インフラセンター (Japan Publishing Organization for Information Infrastructure Development) の日本図書コード管理センター (Japan ISBN Agency) から発行・管理運営されている。



ISBN (国際標準図書番号)

日本図書コードのうち、書籍を特定するための識別子がISBNである。ISBNは、イギリスの標準図書番号であったSBN (Standard Book Number) が、1970年に国際標準化機構 (ISO) 規格として承認され、世界各国へ普及したもので^{*3}、日本では1981年から従来の書籍コード^{*4} に代わって実施されている。

ISBNは1981年1月に実施され、当初は10桁で表示されていたが、2006年に付番可能な番号が枯渇しそうな地域が出てきたため、新たに13桁の規格が制定され、2007年1月から日本でも施行された。現在のISBN-13の規格構成は以下の通りであ

^{*1} 『出版年鑑2014-1 (資料・名簿)』 (出版ニュース社、2014年7月) 参照。

^{*2} 標準のJANコードとは互換性はあるが区別する。

^{*3} 雑誌には書籍とは別規格であるISSN (International Standard Serial Number) が使用されている。

^{*4} 1970年以降の書籍には、日本書籍出版協会と日本出版取次協会が制定した書籍コードが振られており、さらに以前の書籍は、国立情報学研究所のNCID (NACSIS-CAT ID、NII書誌ID) や、国立国会図書館のNBN (National Bibliography Numbers、JP番号、日本全国書誌番号) などが振られている。

る。

ISBN-13（2007以降）の規格構成

《記入例》 ISBN ●●●—◎—○○○○—××××—△

●…書籍であることを示すフラグ。978、979のいずれか。

◎…国、言語圏、地域を示すコード。日本は4。

○…出版社コード。

×…書名コード。

△…チェックデジット^{*1}。

ASIN

インターネットショップの最大手であるAmazonでは、膨大な商品を識別するために、数字とアルファベットを組み合わせた10桁の独自のコードASIN（Amazon Standard Identification Number）を用いている。このうち、書籍についてはISBN-10の識別コードが、書籍のASINとして使用されてきたが、2007年1月からISBN-13へ改訂されたことにより、これまで一致していたISBNとASINのコードが一致しなくなり、利用者の中で混乱が生じた^{*2}。結果的に2007年以降もISBN-13とISBN-10が併記されており、「ISBN-10=ASIN」という関係性は引き継がれている。

ASINはAmazonで取り扱われる全商品のうち、書籍以外の商品すべてに与えられており、コードはAmazonグループ内で世界共通している。Amazonでは製品のURLの構造が、「<http://www.amazon.co.jp/商品名および著者名のエンコード/dp/ASINコード/パラメータ>」となっており、URLから「商品名および著者名のエンコード」と「パラメータ」を省いて、「<http://www.amazon.co.jp/dp/□□□□□□□□□□>」とASINのみ表記も可能である。

2. その他の書籍コード

書籍を特定するための識別子はISBNに限らない。各図書館固有の書誌レコードIDや請求記号など、目的に応じて多様なコードが付与されている。試みに国会図書館の蔵書検索で検索すると、ISBNの他に請求記号、全国書誌番号、MARC No、NCID、書誌ID等が出てくる。また、近年では古典籍の画像やテキストデータの公開を目的としたデータベースが数多く作られており、国立国会図書館デジタルコレクションの古典籍資料には、DOI (Digital Object Identifier) が付与されるなど、データの収集・管理のために、識別子の重要性はいつそう高まっている。

^{*1} チェックデジットは登録コードの誤りを検出するために、末尾に付与される検査数字のこと。日本図書コード管理センターのサイト内でISBN-13のチェックデジットが研算できる。

^{*2} Amazon webservice のDiscussion Forumsでの「2007年からの和書のASINについて」(<https://forums.aws.amazon.com/thread.jspa?messageID=51342>) 参照。

NBN (National Bibliography Numbers)

全国書誌番号、JP番号とも称する。NBNは『全国書誌』に収録される書誌レコードを識別するための番号であり、書籍そのものに付与されるものではない。8桁の数字で表示されるが、書誌番号の構成は期間によって異なる^{*1}。

MARC (MACHine Readable Cataloging) No.

MARCとは機械可読目録のことで、書誌レコードを定められたフォーマットにより、コンピュータで処理できるような媒体に記録したもの。これに付される番号をMARC No.と称する。国立国会図書館ではUNIMARCに準拠する形でJAPAN/MARCを制定しているが、公共図書館では民間のMARCを利用するところも多い。主なMARCとしては、株式会社TRC図書館流通センター (TRC MARC)、日販 (NIPPAN MARC)、大阪屋 (OPL MARC)、日書連 (日本書店商業組合連合会) MARCなどがある。

NCID (NACSIS-CAT ID)

国立情報学研究所 (NII) が提供している日本最大の総合目録検索サービス、NACSIS-CAT (National Center for Science Information Systems, CATALOGING system) における書誌レコードID^{*2}。複数の参加機関^{*3} が各種のMARCを参照しながら、オンラインで目録を作成・共有している。レコードを発行するとNACSIS-CATの目録システムから自動でIDが付与され、書籍についてはBN・BA・BBいずれかに、8桁の英数字を組み合わせたもので表示される。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/index.html>)

青空文庫は国内において著作権の消滅した文学作品を収集・公開している非営利のウェブサイトである。富田倫生氏を呼びかけ人とし、ボランティアによって様々な文学作品がフルテキスト化されている。収録作品数は13,063作品 (2015年5月8日現在)。

公開されている作品は、サイト内の総合インデックスから作家毎、作品毎に50音別に見ることができる。全作品リストはCSVファイルで公開されており、誰でも入手することが可能である。

青空文庫では作者と作品にそれぞれIDが付されている。図書カードのURLを見る

^{*1} 「JAPAN/MARC MARC21 フォーマットマニュアル 単行・逐次刊行資料編 (改訂版)」
http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/pdf/JAPANMARC_MARC21manual_MS.pdf (2015年4月30日現在)

^{*2} Webcatは2013年8月にサービスを終了したが、後継としてCiNii Booksが2011年11月から開設されている。

^{*3} NACSIS-CATへの参加機関数は1,263機関、図書所蔵登録件数 (累積) は126,317,769件となっている (2015年3月31日現在)。

と、「<http://www.aozora.gr.jp/cards/人物ID/card作品ID.html>」となっており、人物IDは先頭が0で6桁固定、作品IDは桁不定の数字で表示されている。総合インデックスのリストと互換性はないため、IDからの検索はできない。

3. 日本古典籍コードにおける課題と意義

ここまで、日本における書籍コードをみてきたが、「ISBN」「NBN」「NCID」「MARC No.」など、一冊の書籍あるいは一件の書誌レコードを特定するだけでも、実に多様なコードが用いられており、これらが互いに連動していることが分かった。ほとんどのコードは体系に書誌情報を含まないため、容量限度まで用いることができる。ただし、冒頭に示した通り、新刊の出版点数は増加しており、今後も膨らみ続ければ、いずれはISBN-10のように番号が不足する危険性もはらんでいる。コードが枯渇すれば、新たなコードを策定しなければならないため、これからも書籍コードは増えていくだろう。

近年、盛んになっている日本古典籍のデジタルデータ化も、各機関が用途に応じて個別に対応しているのが現状であり、これらを統括するような統一コードは未だ存在しない。さらに、青空文庫のような非営利のサイトは、閉鎖に伴うデータ消失のおそれもあることから、公共機関においてデジタルデータの窓口を設け、情報収集やコード管理を行うことは重要な課題であろう。

しかしながら、現行の書籍と古典籍とは自ずと用途に違いがあり、全ての日本古典籍を識別できるような、永続性のある統一コードの策定は非常に困難を伴うものである。

最早、文学研究においてもインターネットの利用は常識であり、資料保存のためにもデジタルデータを公開する機関は今後も増え続けるだろう。同時に、閲覧のための渡航が容易ではない在外研究者のみならず、国内の研究者や、一般大衆によってデジタルデータが積極的に利用されていくことは明らかである。だが、デジタルデータは利用の簡便さと裏腹に複製や加工もたやすく、デジタルデータの扱いに不慣れな利用者が、所蔵の曖昧なデジタルデータを引用するなどの、トラブルが生じる危険性も考えられる。そうした事態を未然に防ぐためにも、公共性の高い機関から発行される、統一コードによるデジタルデータの紐付けは急務なのである。

こうした統一コードが策定された暁には、研究利用が可能な信頼性の高いデジタルデータであることを、利用者に向けて明確に保証するとともに、このコードを利用した研究成果を内外に発信することで、デジタルデータの価値はいつそう高まり、統一コードが広く一般に普及するようになるだろう。統一コードの存在は多くの利用者の研究を円滑に進める潤滑油となるに違いない。

《引用図版》

井黒佳穂子『テキストとイメージの交響－物語性の構築をみる－』（新典社、2015年）

《参考文献》

松平直壽『コードが変える出版流通 ISBNのすべて』（日本エディタースクール出版部、1995年）
JPO一般社団法人 日本出版インフラセンター 日本図書コード管理センター

<http://www.isbn-center.jp> (2015年4月30日現在)

『日本雑誌協会 日本書籍出版協会50年史 Web版』

<http://www.jbpa.or.jp/nenshi/index.html> (2015年4月30日現在)

国立情報学研究所 目録所在情報サービス NACSIS-CAT Catalog Information Service

<http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/> (2015年4月30日現在)